

世界遺産の価値を未来につなげるために

小笠原諸島森林生態系保全センター



小笠原諸島が平成23年6月に世界自然遺産に登録され、今年で5周年になります。

この5年間、父島では外来種のプラナリアのまん延により固有種の陸産貝類（カタツムリの仲間）が大幅に減少したり、兄島では昆虫類を捕食してしまうグリーンアノール（外来種のトカゲ）の侵入が確認されるなど、世界遺産の価値を脅かす様々な出来事が起きました。

こうした問題に対し、林野庁、環境省、東京都、小笠原村で構成する小笠原諸島世界遺産事務局では、外来種駆除を中心とした各種の対策を進めています。

しかしながら、地域からは「行政が無人島で何をやっているかわからない」などの声も聞かれ、島民への



国内希少種：

キノボリカタマイマイ



兄島の台地上、過去の駆除地にモクマオウの稚樹が発生

高校生が手鋸を使ってモクマオウを伐採
伐採後は、スタッフが切り株に萌芽を防ぐ除草剤を塗布

丁寧な説明が求められると同時に、島の将来を担う子供たちに対しても、小笠原の自然と今後の在り方について考えてもらう機会の提供などが大切になってきています。

小笠原諸島森林生態系保全センターでは、学校と連携し、生徒たちに国有林内で外来植物の駆除作業を体験してもらい、森林生態系の保全に関する理解を深めてもらうための取組を進めています。

11月4日には、都立小笠原高校の1年生が「奉仕の時間」として、兄島で過去に当センターが外来植物のモクマオウを駆除した場所において、新たに発生した稚樹や萌芽の伐採作業を行いました。

今回は、環境省小笠原自然保護官事務所と小笠原村役場環境課とも協力し、駆除木を活用したグリーンアノールの捕獲用資材の製作や、「将来の小笠原」をテーマにしたディスプレイ等、カッション等の時間も取り入れました。



高校での事前学習。「将来の小笠原」をテーマに、それぞれの夢や考えを発表してもらう

生徒たちからは「自然を守るには僕ら若い世代の力が必要だ！」「外来種にも命がある。駆除するだけではなく利用してあげるべき」など、様々な意見が出され、多角的な視点から小笠原の自然について考えてもらう機会となりました。

今年度はこの他にも、小笠原中学校を対象に父島の東平サンクチュアリでキバンジロウの駆除を、母島の小中学校を対象に平島でジュズサングの駆除などを実施するとともに、内地からも、東京農業大学ボランティア部の活動や、筑波大学大学院の現地演習などを受入れ、島内外に小笠原の現状と対策について知ってもらう取組を行っています。